
君からのメッセージ

月詠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君からのメッセージ

【Nコード】

N6801X

【作者名】

月詠

【あらすじ】

高瀬蓮は、中学の頃付き合っていた彼女と、とある事情により別れることになる。

高校へ入学したら、新しい恋を始めよう。
そう思って入学した高校。けれど、近づく女子といつも比べてしまふ。なかなか次の恋へ進めない蓮は、ある日、図書館で一通の手紙を見つける。それが、自分が高校に入って、初めて気になり出していた相手だと知って……？

・プロローグ・（前書き）

マザコンのように感じられる、プロローグです。

.....。

.....。

いえ、大丈夫ですよ?!マザコンじゃありません!

ちよつと言葉を間違つた結果、マザコンのように感じられるだけです!ちゃんと、自立した男になります!マザコンではない!

大事なことなので、再三言つよ。

マザコンじゃない!

・プロローグ・

自分で言うのも変だが、俺のお袋は凄い。そう、幼い頃からずっと思い続けていた。

そんなお袋に育てられてきた俺は、お袋の期待に副うほどの、お袋に恥をかかせないような大人に、なっただろうか？

なっっていればいいなと思いつつながら、でも、お袋から見ればまだまだ、いやこれからずっと、俺は子供のままだろうって。だって、

紛れもない、お袋の子供なんだから

そんな俺には、幼い頃、すごく不思議だったことがあった。そして、無邪気にお袋に尋ねたことがあった。

『どないしてパパはかえってこうへんの？』

あの時は、酷く焦った。

いつも笑顔を絶やさず、どこまでも優しく穏やかなお袋が、あそ

ここまで乱れ喚き、暴れるようにして泣き出したのだから。

理由は全然分からなかった。でも、ようやく元に戻って笑ったお袋の笑みは、悲しい色に染まっていた。

今でもハッキリと覚えてる。あんな、とても辛くて苦しそうな笑みを見たときに受けた、鋭いくらいの衝撃を。

お袋は笑っていて当然。

お袋は何でもできて当然。

お袋は優しくして当然。

そんな、全然当然じゃないことを、俺は当然のように受け入れていた。

今思うと、あのときの俺はまだ4歳だ。無理もなかったのかも知れない。でも、それでも、あのときの無邪気さには今でも吐き気がする。

それでも今、お袋は当然のように笑っている。だから、俺も決めたんだ。

お袋のような、懐のでかい奴になろうって。

お袋がずっと幸せな笑顔を作っていていられるように、何でも頑張ろうって。

お袋が胸を張って、“この子が自分の息子”だって言えるような、そんな子になろうって。

心にずっと誓ってきた。お袋のためになら、他人の為になら、自分の体をはれるような男になろうって。

あゝ、寒い。

俺はズボンのポケットに手を突っ込むと、無人の屋上で空を見上げた。どこまでも高く澄んでいる空は、秋特有の色合いがあるよ。うな気がした。

「あ、やっぱりいた」

そう言いながら俺の隣に躊躇なく座ったのは、1年のときに知り合った、神崎 馬鹿だ。

「……今、馬鹿って聞こえた気がする」

「気のせーや」

「気のせいじゃない！絶・対に今馬鹿って言われた！」

それからこう言つときばっかり勘が冴える奴。

本当に、何でこう………いや、やめておこう。鬼のような形相をした化け物が今にも角を出そうと鼻息荒くして助走をつけてやがる。

「で？ 菖蒲が何でここにいるんだ？ 友達と飯、食うんじゃないのか？」

「うーん、そうだったんだけど……」

すると彼女は「アハハ」と乾いた笑みを浮かべながら、俺の隣に座り直した。

「あー、もしかして、“彼氏と食べることになっちゃった、テヘ”って言う……」

「お前が とかキモイし。やめろや馬鹿」

「馬鹿に馬鹿って言われるのは心外だな」

「馬鹿に馬鹿って言って何が悪いのよ？」

「少なくとも俺はお前よりテストの点数はいいぞ？」

「学力の話しじゃなくて性格の話しよ、大馬鹿野郎」

これが俺と菖蒲のいつもの会話だ。いつから、と言われれば多分、会ったときからずっとだと思った。

最初にこんなこと言い出したのは、確か、菖蒲だ。

「お前さあ。男だけじゃなく女にまで振られる可哀想な奴だったんだな」

「なっ?!ち、違うし!ってか、男子に振られてないし!」

慌てて体裁を取り繕う菖蒲を見て、俺は「あー、はいはい」と片手をヒラヒラと振った。

そんな俺の態度がもちろん気に食わなかった菖蒲は「ふが　っ　!!!」と意味が分からない唸りを上げていた。

そこがまた、可愛かったりする。

神崎　菖蒲。中学1年の夏から付き合い出した、俺の彼女だ。

よく笑ってよく怒ってよく泣く馬鹿で、ちよつとしたことにでもよく怒って泣いてる。さつきみたいに変な声をよく上げる、単純馬鹿だ。

単細胞でできてしまっている頭が痛々しい。

「蓮……?今君、すごく失礼なこと考えてなあい?」

ニコニコニコニコ。

どこまでも笑顔で、そう、笑顔なんだが、怖い。

背後にあるオーラが赤を通り越して黒になるほどに黒い彼女を見

て、俺は内心だつたらだに汗を流していた。

もちろん、冷や汗だ。

「いーえ？そんなことありませんよぉ〜？」

「あらあ、蓮君が敬語で話すなんて、珍しいですねえ？」

あー、駄目だ。完全にキレてる。

そう感じた俺は、素直に頭を少し下げた。

「すみません、失礼なこと考えてました」

「フン、よろしい。私に逆らうなんて、200万年早いのだよー！」

仰るとおりです。

そんなことを考えて顔を上げると、菖蒲と目が合って、噴出した。

こんな日常も、後少しもすれば終わってしまう。それが分かっているから、とてもやりきれなくて切ない。

「後、少しだな……」

俺の言葉に、菖蒲はピクツと肩を震わせた。そしてそのまま、力なく頷く。

「2ヶ月、だね……」

俺たちはどちらからともなく、手を繋いだ。そして、どこまでも高い澄んだ空を見上げる。

後2ヶ月もすれば、俺たちは中学を卒業する。そして、俺と蒼蒲は別れる。

学校でも有名なくらいのバカップルである俺たちが別れるのには、複雑、なのかよく分からない理由があるからだ。

今はそれを思い出すのも、辛い。

そんなこんなで迎えた卒業式は、今までのどんなことよりもずっと、空虚で無意味な、悲しい式だった。

『卒業生が退場します』

その言葉と一緒に聞こえてくる無数の拍手。その中に聞こえてくる、周りの奴らの嗚咽。

ハンカチを握り締めている校長や、涙を必死に堪えている担任。

1・2年でも泣いている後輩がいて、そこには少し驚いた。

それでもやっぱり、俺は泣けなかった。

本当の悲しみは、ここじゃない。ここに、本当に俺が恐れている、悲しむべき別れはないんだ。

「お前、何で泣かないんだよ！昨日言っただろ？泣けて！」

「なんでやねん！そないゆうなら自分が泣けばええやろ！」

出身が大阪だったと言うこともあり、俺は時々大阪弁になることがある。と言っても、小さな頃に少し喋っていたくらいだから、正しい大阪弁なのかどうかなんて分からない。

多分、間違ってるんだろっけど……。

「俺じゃ駄目なんだよ！お前が泣くからこそ、周りの女子がもって泣くんだよ！そうすれば俺がその子たちを慰めて……！」

「まずはその下心を消せ、ドアホ」

ゲシツ！と尻を蹴り上げると、そいつは「ふあぎや？！」と大きな声を出して講義の声を上げている。それを周りの男子たちもつと大げさにしながら楽しんでいるのを見て、ようやく感傷的になれた。

こないじゃれあうんも、これが最後やんな。高校行けば、相手が変わるんやから。

だから思った。今日だけは、今日だけは絶対、最後までずっと笑

い続けていようって。

そうすることができれば、きっとこれからも、ずっと笑っていられるから。」

「そっだ、蓮」

弄られていたはずの親友 高橋 直人が俺の隣に並び、壁に背中をつけて呼吸を落ち着かせていた。そんな直人を見て、俺は「あ？」と声を出す。

「お前、神崎と別れるんだって？」

「っ」

ドクンと、心臓が大きく波打った。

それを知ってか知らずか、直人は続けた。

「理由があるらしいけど、それはお前が俺に教えたいと思ったら、教えるよ？絶対に」

その目はどこまでも真剣で、こいつうときやっぱり、こいつが親友でよかったと思うんだ。

「ああ」

頷いてそう答えると、満足したように笑った直人が、その笑みのままで、

「で」

と続けた。笑顔で言っているはずなのに、その笑顔が少しずつ黒くなっている気がする。

「神崎は女子高らしいじゃねえーか？何でだよ！おい！」

「はあ？」

最後に怒られる意味が分からなくて怪訝そうにしていると、直人は心底悔しそうに拳を握り締めていた。

「神崎がフリーーになったんだったら、俺が神崎を手にするつもりだったのにいゝ！！！」

「……………」

何故だろう。とても哀れに見えてきた。

そんなことを思いながらため息をつくとき、直人はそんな俺に気づいて不敵に笑った。

「まっ、ぜってえー無理だろうとは思ってるけどな」

「……………直人」

無理だと分かる程度の正気は残ってたのか。

驚いている俺に気づいた直人は、目を半目にした。

「お前今、ぜってえー失礼なこと考えてるよな」

「んなことねえーよ」

シレッとそう返しながらも、俺の目はあいつを追っていた。そのことに気づいて、自嘲してしまふ。

今日で終わりだと、そう分かっているからこそ、目で追うのかもしれない。少しでも長く、少しでも多く、彼女のことを覚えておきたいから。彼女を想っていたいから。

「なあ、蓮」

「んー？」

「俺さ、本気で神崎が好きなんだ」

……………。

しばらくの間が空いてから、俺はようやく直人を見ることができた。そしてその目は、やはり予想していた通り、真剣だった。

「……………本気、なんだな」

「だから、言っただろ？本気だった」

そう言った直人は、笑いながら苜蒲を見ていた。

その目が、少し前までの俺を思い出させて、酷く切ない。

あんな事情がなければ、俺たちはまだ、付き合い続けることができたのだろうか？それとも、直人の気持ちに気づいて、譲ったのだろうか？

俺はフツと静かに笑うと、後者を消し去った。

譲るも譲らないも何も、その前に俺は、絶対に直人の気持ちに気づけなかった。

そして直人も、俺たちが別れなければ絶対に、そんなことは言わない。そういう奴だ。

だから。

「……後で、話すよ。 菖蒲を頼むな」

言われた側の直人と言えば驚いた表情をしたかと思うと、すぐにニヤツと不敵な笑みを浮かべた。

「頼まれなくてもやってやるよ」

何故だか今、無性にこいつが頼もしくて、大きく見えた。

背は、俺よりかなり低いのに。

「一言余計だ、アホ」

「アホにアホって言われるとかなり傷つくもんなんだな。覚えておこつ」

「だあゝから！お前はシビアに終わらせられないのかよ！」

勝手に心の中を読んだお前が悪い。

そう思いながら、それでも心の中では本当に感謝している俺は、こいつを弄りながら思っていることがあった。

こいつなら、絶対に菖蒲とうまくやっていけるって。そんな、俺が考えたって意味のないことを、ずっと考えていた。

夕焼けの空を見上げながら、俺たちは歩いている。別れのために、1歩ずつ、噛み締めるようにして歩いている。

卒業式が終わった後、近くのホテルで懇親会を盛大に盛り上げがせ、気づけばもう夕暮れ時だった。流石にこれ以上は駄目だと言うことで、最後の別れを惜しみながら、俺たちは会場を後にした。

ここからは、俺たちが1番恐れている別れの始まりだ。

「夕日って、こんなに綺麗なんだね」

ポツリと呟く彼女の声が、微かに震えていた。

「せやなあ」

そして俺の声も、同じように震えていた。

繋いだ手をさっきより強く握り締めて、足を止める。目の前には

もう、菖蒲の家の門がある。彼女が門の中に入ってしまえば、もう俺たちは恋人ではない。

ただの、中学のときのクラスメートになる。

それが分かっているから、俺たちはこれ以上進めない。進みたくない。

「……………いつまでも、こうはしてられへんで？」

彼女は体を震わせながら、コクンと頷いた。そんな彼女が痛々しくて、でも同時に、とても愛しくて。

だから俺は、ゆっくりと、手を離れた。

離れた瞬間の彼女の横顔は、今でも忘れられない。

「……………」

大きく見開かれた目には、涙が溜まっていた。瞬きをして流れ落ちた雫は、頬を伝ってあごに行き、やがては地面に落ちた。

その様子をじっくりと見ているなんてことは、できなかった。

地面に落ちる少し前に、俺の体は動いていた。

「れ、ん……………」

グツと力を入れて、菖蒲の体を自分に押し付けた。

どうしようもないくらい、好きだった。気づいたときにはもう、止められないほど大きくなっていった想い。だから俺は、彼女に告白して、付き合っただけ。それなのに。

「運命って」

「……うん」

「残酷やんなあ」

「っ！」

息を詰まらせた彼女は、小さく首を振って、無理矢理笑った。

「そんなこと、ない、よ……？だって、運命が残酷だって、言うんなら」

ゴシゴシと目を擦って、精一杯の笑顔を作る。それを見て、俺も熱いものをどうにか堪えて、笑うことができた。

今日は、今日だけはずっと、最後までずっと、笑ってるって決めた。ただろ？

「私は、蓮に……出会えなかったもん」

どんな別れであったとしても、これが最後ではない。死別しない限り、また会える可能性はある。

例えば今、ここで彼女と別れなければいけないとしても、それでも、出会ったことを後悔はしない。

「めっちゃ、楽しかったで？ホンマに楽しかった」

「……うん、私も」

短い間だった。でも今は、短くてよかったって思う。

もし付き合っている時間が長かったら、想っていた時間がもっともつと長かったら。今こんなふうに、別れることなんてできなかったから。

今ならまだ、身を引ける。前に、進める。

「楽しかったから。ホンマに、好きやったから。せやから俺は、また恋するわ」

微かに俯かせていた顔を上げた彼女は、「え？」と不思議がるような表情だった。

「お前に恋して、両思いになって、それで知った気持ちもあって、付き合っただけ楽しいって思えた。こんなに楽しいことはなかった。お前がいたから、だから楽しかった」

恋がどれだけ素晴らしいもので、そして同時に、どれだけ辛いものなのかを知った。

「だから今度もまた、そう思える相手を見つけようって思う。それが一番、手っ取り早い諦め方だろ？」

しばらく呆けていた彼女も、やがて小さく笑って、「うん」と頷

いた。

きっと彼女は、思っていたはずだ。

新しい恋なんて、できるわけないって。でもそれは間違いだって思う。それに、こいつには直人がいる。あいつが、こいつのそばにいてくれる。

だから、安心して別れることができる。

「だから今度、お前に彼氏ができて、俺に彼女ができたら、また会おう。」

そうすることで、きっとまた、前に進めるから。

「約束、やで？」

「……うん！」

ニッコリと、花の咲いたかのような笑みを、最後に見れたことが救いだった。

もしこの場で彼女が、悲しい表情をしていたら。きっと俺は、そのまま彼女を連れて、どこかに行ってしまったかもしれない。

だからこのとき、本当にホッとしたんだ。変なことを、しないですんでよかったって。

「約束破ったら、何にする？」

「せやなあ〜……。ほんなら、マジで不味いプロテイン一気飲みとかどや!?!」

「ええ!?!あんなの飲まないといけないのお?!」

「約束を破ったら、や。破ったら。破らなええねん」

「せやなっ!」

指切りをして、彼女が玄関のドアに手をかけて、ゆっくりと振り返った。

「バイバイ、蓮」

「……またな、菖蒲」

ボタンと閉まったドアの重い音の分だけ、俺たちの中には壁がある。

もう2度と、女として、彼女に接することはないだろう。

そう考えて、胸が痛んで。

「……少しやったら、ええよな?」

流れる涙を無視して、俺は走った。

またもう1度、彼女に会うためにも。

1、日常生活

高校に入学して、早2週間。高校生活にも慣れて、ようやく周りの顔と名前が1部一致するようになって来た頃だ。

「おはよーさん」

声をかけると、そいつは「おう！」と嫌に元気一杯の声で答えた。

一応親友の高橋 直人だ。ツンツンの髪は茶色で、ピアスが合計3つついている。赤、黄、緑の信号色だ。

「一応って何だよ、一応って！しかも信号色じゃない！」

「だから心読むなって」

そんなことを言い合いながら登校するのが、俺の毎日の始まりだ。教室に入れば何人かの女子が話しかけてくるが、速攻で話を終わらせて教室を出る。もちろん、直人を引っ張って。

「何でお前女子と話さないんだよ！俺が女子と知り合いになれないだろ?!」

「意味分かん。つーか、そない下心ある奴を好きになる戯けがおるんか？」

「タワケって何だよ、タワケって！あれか？畑を耕す、あれか?!」

「それ、鍬やる？戯けと全然ちゃうがな。アホか」

何で“戯け”が“鍬”になるのかが分からなくて呆れたため息をつくくと、直人は物凄い驚いた表情で飛び上がった。

「何?! タワケって、畑を別けることじゃないのかよ?!」

どうやら、“田分け”だと思っていたらしい。つーか、それ鍬と関係ないじゃんかよ。

俺は「ハア」と盛大なため息をつくくと、屋上に出てすぐに壁に“戯け”と言う漢字を書いた。それを見た直人はと言うと……。

「……何だそれ？蛇か？」

何でやねん。

「漢字や、漢字。ふざけること、おどけの意味を持つ漢字や。少しは辞書引きい？」

「何で俺がそんな面倒なことしないといけ」

「馬鹿だからやる？」

シレッとそう返すと、直人は「馬鹿だと?!」と怒鳴り声を上げていた。そんな声を聞きながら、何となく、あいつを思い出す。

今頃、何してんのかな……。

そんな俺に気づいたのか、直人はため息をついて俺の隣に腰を下

ろした。

「新しい恋、するんじゃないかったのかよ？」

「……まあ、そのつもりだったんだけどな」

気づけばあいつを思い出してる自分がある。あいつを探している自分がある。そして、女子を見て、話して、触れるたびに思う。

あいつじゃない。

当たり前なのに、その事実が胸を切り裂くかのような痛みを伴ってくる。だからどうしても、女子と接したくなくなってくる。

「このままじゃ、いつまで経っても約束守れないってな」

最後に見せた、最高の笑顔を思い出して、思わず苦笑してしまう。

わざわざ餓鬼っぽい指きりを律儀にしてまで交わした約束なのに、このままだと果たせなくなってしまう。

「俺から、約束したくせにな」

踏ん切りがつかない。

あいつ以上の奴を、見つけれられない。見つけようと思わない。

過去に縛られ続けていたいと、願っている自分がある。

「……色々考えすぎなんだよ、お前は」

そう言うなり立ち上がった直人は、俺の頭を軽く叩いた。

「っ?」

軽い痛みを覚えて頭を押さえると、ケラケラっと笑っている直人の顔が、目に入ってきた。

「周りから完璧って言われてるお前が、恋では不完全な人間になるんだな」

「……完璧な奴なんているわけないだろ? いたら見てみたいよ」

すると直人は、俺の顔を指差して、また笑った。

「俺から見た、完璧な奴だ」

「アホ」

手を払って時間を確かめてから、俺は屋上を出た。もちろん直人もその後続く。

「お前、どうやってたら恋できるか、知ってるか?」

後ろからの声に、俺は振り返ることなく「はあ?」と返した。振り返れば見えるはずだ。ニヤニヤと笑っている直人の不気味な顔が。

「不気味って何だよ、不気味って!」

「ゲシッ!」と背中を蹴られ、かと思っただらバランスを崩して倒れた

音が聞こえた。振り返ると案の定、直人が尻と頭をシコタマ階段にぶつけているところだった。

「アホ」

「うるせー！」

顔が赤くなっているのは恥ずかしいからだろう。俺はため息をつくと、直人が立ち上がるのを待つことなく歩き出し、席についた。高瀬と高橋だから、席は近い。と言うか、前後だ。それが何だかムカツク。

「で？恋の仕方とやらは？」

何気に気になっていた俺がそう投げかけると、直人はやはり、ニヤニヤと不気味に笑った。

「お前、意外に一目惚れするタイプだろ？」

「は？」

思わず出た声を聞くことなく、直人は更に続けた。

「で、一目惚れしたことに気づかないでドンドン好きになっていくタイプだ。菖蒲のときだってそうだっただろ？」

当時のことを思い出し、俺は苦笑した。

一目惚れした覚えはない。ただ、何とはなしに気になりだして、よく見ているうちにいいところも悪いところも見つけて、全部見た

上で好きになっていた。が、今思うと確かにあれは一目惚れだ。

「なんや、悲しいわ」

「何でだよ？」

「お前に恋を教えられる日が来たっちゅーことが」

「何発殴ればいい？」

既に拳を作っている直人を見てケラケラと笑うと、やっぱり直人もケラケラと笑った。笑い合って実感した。

こいつの隣が、一番居心地がいい。男の中では。

「だから、お前は待つてればいいんだよ。気になる奴ができるまで」

平然とそんなことを言われてしまっでは、これ以上あまり言えない。

「……今日からお前は、俺の恋の師やわ。頼んますわ、師範！」

「何か嫌だな、それ」

そんなこんなで、今日の授業も早々に終わった。

俺はバスケット部に入部した。もちろん直人もだ。

今思うと、直人と俺は小学校のときからずっと一緒にバスケットをやってきていた。1番連帯プレーが上手くいくのもやっぱり直人だ。

「何や、複雑やなあ」

「何でだよ」

少し怒った口調で言われた俺は、ペロツと舌を出すとシュート練習に戻る。

俺と直人はいつも練習後に、ゴール下、フリースロー、3Pの順に打ち、本数の少ないほうが負けと言うゲームをする。

もちろん、負けた奴はプロテイン。

「あ~~~~~!!!!!!」

「いよっしゃー!」

グツ!と高らかに拳を振り上げる俺の横で、直人は自分の手を見つめてブツブツと何だか恐ろしいことを呟いているような気がしないでもないが、この際無視だ。

「今日は特別マズイヤつだから、気合入れて飲めよ?」

そう言ってプロテインを差し出すと、恨みがましい目で俺を睨んでくる直人が、ゆっくりと手を伸ばしてそれを飲んだ。

「~~~~~っ?!」

喉を押さえて吐きそうになっっている直人を見て、これからこのプロテインだけはやめようと、密かに心に誓った。

「マネージャー！悪いんですけど、スポドリ貰えますか？」

声を上げると、3人いるマネージャーが我先とスポドリを持って鬼のような形相で競い合っていた。

うっん……。

俺は自分の隣で寝転がって瀕死状態の直人の耳に口を寄せ、ボソツと呟いた。

「怖いな」

「おう」

これは、恋は盲目っていうやつのも一種なのだろうか？というか、本当にそうなっちまう奴がいるんだろうか？ 彼女ら以外で。

家に帰った俺は、珍しく上機嫌なお袋を見て目を細めた。

「どないしたん？」

するとお袋は、困ったような笑みを浮かべて、「うっん」と言おうかどうか迷っているようだった。

「隠し事はなしやて、前にも約束したやろ」

「……せやね。堪忍」

菖蒲のことを思い出してか、お袋はさっきよりも表情を曇らせてしまった。そんなお袋を見ると、胸が苦しくなる。

「それで？どないしたん？」

「うん。あんね？お母さんのお兄さん、覚えてる？」

「ああ、智治ちとせの兄貴？」

お袋は「そう」と頷いて、それからとても言いづらそうに口を動かした。

「……実は、お兄さんとお義姉さんが、この家に住むことになったんよ」

「何だよ、そんな……ん？」

今、何て言った？

呆然と頭を上げた俺を見て、お袋はやっぱり困ったように笑った。

「うん。一緒に住むの」

……。

「智治の兄貴が？」

「お兄さんと、お義姉さんが」

正直に言おう。

俺は智治の兄貴は好きだ。それはもう、めっちゃ可愛がってくれたから。だが、対する姉さんは違う。

……いや、いい人なんだけど、人をからかって遊ぶ人だから気疲れしてしまう。嫌い、と言うわけじゃないが、苦手意識は持っている。

「でも、何で？」

智治の兄貴は俺が小学3年だったかるときに、大阪からこちらに引っ越してきた。何でも喫茶店をやりたいからだそうのだが、詳しい事情は聞いていない。

「お兄さんが喫茶店をやる言い出したんは、お兄さんの親友さんがお亡くなりになって、その親友さんがやってはった喫茶店を誰が継ぐんか問題になったかららしいねん」

「ほおん」

んで？それが何で同居の話になんねん。

俺の顔を見てそれが伝わったのか、お袋は苦笑した。

「その親友さん、3人の子供がおってん。当時はまだ長男が成人する前やったから、お兄さんが継ぐことでその喫茶店続けてられたんやけどな？」

「その長男さんが成人したお陰で、智治の兄貴は追い出されると?」

「蓮」

窘めるように名を呼ばれ、俺は「堪忍」と呟いた。

確かに、言い方が悪かった。

「お兄さんは自分から言ったらしいねん。自分は手を引くさかい、後は自分たちで切り盛りせえゆうて」

で、住む場所を失ったと。

「アホやん、智治の兄貴」

「まあまあ。」

でも本当は、長男が成人してすぐにお兄さんは出るつもりだったらしいねんけど、その長男がまだいてくださいゆうて、ここまで持ったんやで?」

んじゃ、もうとつくのとうに成人になってた、と。

俺は「ふうん」と言いながら茶を飲み、何となく尋ねた。

「今何歳なん?」

するとお袋は、腕を組んで顎に手を添えた。考えるときのいつもの癖ポーズだ。

「確か、25やったなあ」

「25……。なんや、はんばやんなあ」

「蓮」

「堪忍」

お袋は「もう」とため息をつくど、苦笑して「まあ」と続けた。

「去年から決めてたらしくて、来年から同居することになるからね。今は様子を見ないといけないらしいから」

少し曇った表情のお袋を見て、俺はそれ以上追求することはしなかった。ただ、少し気になった。

今は様子を見る、って……事情持ち？

「来年からは正社員として雇うって話になってね？長男がマスター、次男がサポートに回るらしいんよ」

「ふうん……。末っ子は？」

「まだ高校生やて。せやから、アルバイトかな。確か、蓮と同年
「よ」

「同年？ふうん。」

さほど興味がないと言う顔で食器をキッチンに持って行き、妙に嬉しそうな顔をしているお袋を見た。

「……どないしたん？さつきから」

「ん？ううん」

明らかに上機嫌だ。

理由は分からないが、それほどに嬉しいのだろう。何かが。

「お風呂掃除、お願いね？」

「ん」

俺は風呂を沸かしに風呂場に行き、またリビングに戻ってソファに座る。それでもやっぱり、お袋は嬉しそうだ。

何がそんなに楽しいのか、と言えば、やっぱり智治の兄貴と住むことしかないだろう。ないはずなんだが、何だかそれにしては異様に楽しそうだ。

「……………ん？ ああっ！」

カレンダーを目にして、ようやく気づいた。

「結婚記念日か」

「大正解！」

クルッと振り返ったお袋の手には、白い封筒が挟まれている。

「蓮が学校に行っている間に届いたんよ。お父さんからやで」

「ははあ。それで上機嫌なわけだ。」

俺はようやく納得して頷くと、ソファーに深く腰掛けた。

別に俺は、親父が嫌いとか言う感情はない。

憎んでもいないし、恨んでもいない。中学のときは、月に1度フアミレスで会っていたのだが、菖蒲の件があっつてしばらくは会っていなかった。

寂しい、と言うわけでもないが、何だか物足りない気分にはなる。

それに、親父を恨んだって仕方がないし、何より今のお袋を見れば、恨みなんか消えるだろう。

「……………ハア」

恋は盲目って、本当だな。

微かに甘い香りだった。

しつこくない甘い香りが、鼻腔をくすぐっていた。独特なのにす

「んなりと馴染んでしまいそうになるその香りは、例えると菓子みた
いだと思った。」

「そんな香りを、俺は朝、登校中にかいでいた。」

「……かいでいた、って何だか変態っぽいな。」

「あ、あの、高瀬君」

「顔を上げると、そこには頬を微かに赤らめている女子がいた。同
じクラスの子じゃないように見える。」

「ん？」

「あの、これ……」

「差し出されたのは、所々が焦げているクッキーだった。それを見
て、また今朝の匂いを思い出す。」

「くれるの？」

「あ、はい！」

「微かに震えている手からヒョイツとその袋を取ると、今朝の匂い
とは少し違う匂いがした。でも、どこか似ている。」

「……もしかして、わざわざ作ってくれたの？」

「あ、うん。あの、高瀬君に食べてもらいたくて」

モジモジとしている女子を見て、俺はようやく笑った。

「ありがとう」

すると、何人かの女子が後ろからズドドドドツと駆け寄ってきたかと思うと、俺の机の上にたくさん菓子をバンバン置いてキヤーキヤー叫びながら教室を出て行った。

「……………」

山のようになった菓子を見て、周りの男子の恨めしげな視線を見て、物凄い困った。もちろん、誰より先に話しかけてきたのは直人だった。

「なあ蓮」

「ん？」

「殴っていいか？」

拳の準備ができている直人はチラチラと俺の目の前でそれを左右に振っている。俺は苦笑しながら首を振った。

「嫌に決まってるだろ」

「なら、一つでいいからくれ」

「駄目だよ」

伸びてきている手を全て叩き、カバンから紙袋を取り出して中に

入れた。それを見た直人は、「紙袋持ってきてんのかよ」と、半ば呆れたように言っている。

「1つくらいいいだろ?!」

周りにいた男子たちが「ソーだソーだ!」と抗議の声を上げている。俺はため息をつくとき、苦笑しながら言った。

「これは、あの子達が俺につけてくれたやつなんだから、俺が食わなきゃ駄目だろ」

すると、周りにいた女子たちが一気にキヤーツ!と騒いだ。それを見て、恨みがましい目がより一層深まる。

「もてる男は一味違うねえ」

「凡人の俺たちと言うことが違う」

「あー、やだやだ。完璧なやつほど嫌な奴はいない」

そう言いながらも人のよさそうな顔をしているから、俺も安心しながら笑った。

2、理由

8月と言えば夏。

夏と言えば夏休み、プール、海。

夏休みと言えば宿題。プールと言えば水。海と言えば

「ナンパだあ！！！」

と、拳を高らかに振り上げている海パン野郎が俺の隣にいた。目をギラギラさせて周りを 女子を見ている。

「……なあ直人」

「あゝあゝ?!」

「お前、苺蒲はどうしたんだよ?」

ため息混じりにそう尋ねると、直人は動きを止め、それからこっちを振り向いた。その目は真剣と言うより、怒っているような色合いだ。

けれどすぐにその目を逸らしたかと思うと、

「誰のせいで身動き取れないと思ってるんだよ、この大馬鹿野郎」

と、ボソツと呟きやがった。

理由は分からないが、どうやら今は身動きが取れないらしい。俺のせいで。

好きな子に構ってもらえないから、今は違う女子で気を紛らわそうと。そう言うことだろう。

「お前、呆れるくらい女子好きだよな」

「もちろんだ！」

そう言いながら駆け出した直人を見て、俺は深々とため息をついた。

「高瀬じゃん」

いきなり後ろから声をかけられた俺は、手に持っていたかき氷を落としそうになりながら振り向いた。

茶髪の髪で、前髪がない。というか、前髪が左上に分けられている。筋肉マッチョのこいつ、笹原 健太は、クラスの友達だ。

「海に男1人って、悲しすぎるだろ」

呆れたような哀れむ視線に、俺は苦笑を浮かべた。

「残念。男1人じゃくて、男2人だ。もう1人は女子をはべらせようと頑張っている最中らしい」

海のほうに指を向けると、健太も納得したらしく頷いた。

「ナンパ、か」

「ナンパ、だ」

俺たちは顔を見合わせると、「ハア」と大きなため息をついた。

「で？お前はどうしたんだ？彼女と、なわけねえーよな」

「なんでないんだよ！彼女とだよ！」

怒ったように声を出した健太は、言うてから「いや」と口ごもった。

何やら、こっちはこっちで色々複雑のようだ。

「彼女、ではないか。まだ」

「まだ？」

「そのうち、なるかもしれないやつ」

「つまりは、まだお前の片想い」

「るせーよ。いちいち言うな」

そう言うなり俺の隣に座った健太は、重いため息をつくくと、俺の髪をじっと睨んだ。

「ん？」

「……お前、何で髪染めねえーの？」

俺は茶髪にした健太の髪を見て、自分の髪を触って唸る。

「何でって言われても、面倒だからってしか答えらんねえーな」

苦笑している俺を見て、「だよな」と健太も苦笑を返す。何でいきなり髪の話になったのかは知らないが、どうやら悩み事らしいと言っただけは分かる。

「悩み事なら、相談乗るぞ？」

そう言って健太を見ると、

「お前に言っただろすんだよ」

と、苦笑を返されてしまった。

……む？

「んじゃ、俺はもう行くわ。直人がションボリ肩落として帰って来たしな」

そう言われて海のほうを見ると、確かにナンパに失敗した直人が肩を落としているのが見える。

後ろで「じゃな」と健太が言うのと、俺が直人のほうに歩き出し

たのはほぼ同時だった。

「おい、直人」

あからさまにいじけている直人の肩を叩き、俺は隣に腰を下ろす。

「ナンパの1回や2回や3回や4回の失敗で落ち込むなよ。たかが15回だろ？」

「もう15回だ。たかが何て言えるのはお前くらいだつての」

彼氏持ちの女子を狙うお前が悪い。

恨めしげな目を向ける直人を無視して、俺は空を見上げた。

あの頃の空とはまた違って、晴れ晴れとした晴天だ。日差しが暑く、体中が砂の熱で焼けるかもしれない。

「……俺、振られたんだよ」

「さっきの女子たちにか？」

「違う！　　菖蒲に、さ」

咄嗟には反応できなかった。ただゆっくりと、直人のほうに目を向けた。そのときの直人の目は、酷く静かだった。

何故彼氏持ちの女子ばかりを狙っているのか。その理由は、最初から分かっていた。

「どうしても、忘れられないからって言われてさ」

「……………」

「あいつ、ずっと苦しんでる。」

お前を忘れようと思っただけでも、忘れ方が分からないだって。思い出にできないくらい、想いが膨らんだんだって。だから、辛いって。

ずっと言ってたよ」

空を見上げている直人が、目に映る。無表情のその顔から分かるのは、彼が悲しいと思っただけだ。他の感情は、一切見えない。分からない。

「……………」

俺は、何も言えなかった。言えるはずがなかった。

だって今もまだ、俺は彼女を忘れられていない。彼女以外を、愛せない。同じ気持ちだなんて言えないし、でも嘘だって言えるはずがない。

だから俺は、何も言えない。

「別れなくても、いいんじゃないか？」

この言葉を、実行できたのなら、どんなによかったか。

「互いに想い合ってるなら、無理して別れる必要ないだろ？何で別れなきゃいけなかったんだよ。何で……………なんでっ」

それ以上は口にしない直人の目から、涙が滑り落ちていくのを、俺は見た。その涙が、砂の上に落ちるのを見て、あの日の菖蒲を思い出す。

「……俺たち、双子なんだ」

あの日、あいつは必死に笑ってた。涙を流すまいとして、それでも涙が零れ落ちてた。そんな彼女が愛しくて、愛しくて。

「姉弟なんだから、結婚なんて、できないだろ」

どんなに強く想っていても。どんなに心が惹かれていても。

超えてはいけない1線がある。超えられない1線がある。そしてその1線が、これなんだ。

「どんなに好きになっても、それは姉弟愛なんだよ。それ以上になることもなければ、それ以下になってもいけない。」

そう考えると、恋人よりも姉弟のほうが、絶対に繋がりは強いって。だから、我慢していける。忘れられるって、高をくくってた」

でも、そんなことなかった。

いくら姉弟だと知らされていても、今まで培ってきた思いに変わりはない。崩れることもない。むしろ、知ってから増した思いのほうが強い。

姉弟じゃ、駄目なんだ。恋人としてじゃなきゃ、駄目なんだ。で

も、恋人には、なれないんだ。

「……決めたんだ。2人で」

真実を知った、あの日に。俺たちは自分たちの意思で、別れを決めたんだ。

あのとき、意地を通してでも付き合おうと言い張っていたら、きっとお袋も親父も承諾してくれていただろう。でもそれは、お袋と親父が悲しむことだつて知っていたから、できなかった。

育ててくれた、親だから。

俺たち2人の、親だから。

「だからこの約束は、この約束だけは、絶対に果たさないとイケないんだよ。

どれだけ大きな想いを抱えていたとしても。それを、踏みにじることになるとしても」

これだけは、変えられない。

空は晴れ晴れとしている。悔しいくらいの、眩しいくらいの色と一緒に流れ込んでくる景色がある。

あのときの、彼女の涙。そして、笑顔。

「……あいつが忘れられないって言うなら。あいつが自分から、俺のことを忘れられないって言うんなら」

空から海へ、海から直人へと視線を移し、俺は頭を下げた。

そうでもしなければ、真っ直ぐにこいつを見れなかった。

「お前が、俺を忘れさせてやってくれ」

息を呑む音が、微かに聞こえた。波の音と、カモメの鳴き声と、周りの奴らの雑談。そんな音に混じって聞こえてきた音が、1つ。

「……なんで、俺なんだよ？」

直人の、消え入るような小さな声だった。

「何で、振られた俺に言うんだよ……？ そんなに想ってるなら、何でそばにいてやらないんだよ。何で両思いのくせに、他人に預けられんだよ。お前ら、意味わかんねえーよ！」

その目が、涙でそれ以上声が出ない代わりに、雄弁に語っていた。

自分じゃ、俺を忘れさせることなんて出来ないんだって。自分の、一番好きな奴を幸せに出来ないのに、他人にそいつを頼むんじゃねえーって。

分かってるんだよ、そんなことくらい。それでも駄目なものは駄目なんだって、お前も知ってるだろ？

こっぴつとときに限って人の心を読まない馬鹿を見て、俺は呆れたように笑ってやった。

「俺じゃ駄目なんだよ。あいつのためにも、俺のためにも、俺たち

は離れなきゃいけない。じゃなきゃ、前に進めない」

進まなければいけないって、分かってるから。

「俺は、お前に菖蒲を任せたい。お前だから、任せられるんだ」

お前じゃなかったら、お前がいなかったら、俺は絶対に、あのときキツパリと別れられなかった。あの日、お前の想いを知らないままだったら、俺は今も付き合っていた。

だからこそ、頼みたいんだ。

「だから、頼む。お前との思い出で、俺との思い出を消していつくれ」

「……嫌だと、言ったら？」

顔を上げると、俯いている直人がいた。きっと今、こいつの心は激しいくらい揺れている。菖蒲が好きだと言っ気持ちと、俺じゃ駄目だという気持ちで。

でもさ。お前が“嫌だ”なんて、口が裂けても言えないだろ？

「本気だって、言っただろ」

あの日、お前は真っ直ぐに俺を見て、言ったじゃないかよ。だから俺は、安心して別れたんだ。

「あれは、嘘だったのかよ？」

違うだろ？マジだったから、あんなこと言っただら？

「菖蒲のことが本気で好きで、ナンパだと言いながらラブラブな彼氏持ちの女にしか声をかけないお前が」

自嘲するかのような笑みを浮かべた直人を見て、俺はニツカリと笑ってやった。

「嫌だなんて言えるわけないんだよ」

菖蒲が好きで、だから忘れられない。だから、ナンパと言って女子に声をかける。だが、その女の子に答えられても困るから、わざわざ彼氏持ちに声をかけていたんだ。

だから、失敗するんだよ。

だから、お前に頼むんだよ。

そこまで本気で、菖蒲に惚れているお前だからこそ

託すんだよ

夏休み中にある登校日に、またあの香りがした。やっぱり登校中
のことで、俺は何故だか、その香りが嫌に印象に残っていた。

「で？」

俺の目の前にいるのは、クラスの半分くらいのやつらだった。

「お前らは俺に何の用なんだ？」

大体察しはついてる。大方、宿題を写させてもらいたいというこ
とだろう。

「つーか、俺の前に並んでいるこの時間を勉強に使えよ。」

「何でやってこないんだよ」

そう言いながらも宿題を手渡してしまう俺に、隣の女子が呆れた
ように笑っていた。

「高瀬君も大変だね」

「そういう瀬川はやって来てんのかよ？」

「もちっー！」

そう言ってパラパラと捲った宿題は、

「白紙じゃん」

「Yes!」

……ハア。

そんなこんなで、俺の宿題はいつの間にかクラス中を回り、ついには他クラスにまで旅に出てしまっていた。

「なあ直人」

「おん？」

俺の宿題を事前に写していた直人は、それはもう涼しい顔で汗水たらして頑張っているクラスメートたちを見てニヤニヤしていた。

「お前、さつきからキモイで。何があったんや」

すると直人は、俺に向き直って俺の肩を叩いた。その顔は、どこまでも嬉しそうだ。

「いいことがあったんだよ」

「ほお？」

何が？と促す前に、直人は立ち上がって拳を振り上げていた。

「ようやく今日会えるんだあ!!!」

……そこかよ。

俺はまたため息をつきながら、ニヤニヤと気持ち悪い直人を尻目に、何とはなしに朝の香りを思い出していた。

お菓子に何より近い香り、甘すぎないあの香り。懐かしいようなその香りは、どこかでかいたことがある気がする。

「……どこ、だったかなあ」

気づけばそればかり考えている俺は、どこかおかしいのかもしれないと、直人を見ながら思った。

……あんなふうにはなりたくないな。

3、喧嘩

「馬鹿やる」

「るせー……」

そっぽを向いてムクレタ表情の直人の左頬は、赤く腫れている。

それをやった犯人は俺だが、状況が状況だった為に、特に喧嘩になるようなこともなかった。

「何であないなと言ったんや、自分。馬鹿やる？」

やっぱり“馬鹿”を繰り返す俺を見て、直人はますます目を逸らす。

「だから、うるせーっての」

「このままやと嫌われるで。どないしてくれんねん、この馬鹿」

「……」

とうとうため息をついた直人は、やっと俺を見た。そして、すぐに目を逸らす。

「……るせー」

もちろん、今の俺はかなりキレてる。当たり前だ。あんなことに

なつてキレない馬鹿はいない。

多分。

「ハア……。なあ、直人」

「んだよ」

口をへの字に曲げながら睨むように見てくる直人は、ようやく体をこちらに向けた。

だから俺は、直人の右手に思い切り、消毒液が染み込んだ脱脂綿を押し付けた。

「だだだだだだだっ?!」

「黙れ馬鹿」

さらに強く押し付けると、流石の直人もキレた。

「だあああああ!!! いてえーんだっつーの! アホか?!」

目に溜まった涙と吊りあがった眉を見れば、確かに痛く怖いかもしれない。ただ、頬の腫れがあるせいでアホ面だ。いつもの俺だったらここで大爆笑しただろう。

「お前ほどやない」

淡々と言葉を返す俺を見て、直人は物凄くバツ悪そうな顔をして座り直した。

「……悪かったよ」

俺は直人を見て、それからため息をつくど、冷えピタを左手に持ち、そのまま直人の左頬を叩いた。

バチッ！

「だあっ?!」

跳ね上がって痛がる直人を見て、俺はようやく爆笑した。

「ばあか！」

そう言いながら直人の手を包帯で巻くと、救急箱を閉じて肩を鳴らした。

今から1時間程前。

夏休みが終わって、衣替えになった今日。どちらかと言うと暑がりの直人は、まだ夏服のまま登校してきた。俺はもう冬服に変えていたが、クラスではちらほらとまだ夏服の奴らがいた。

そして馬鹿な直人は、夏服の奴らを集めて「夏よ戻って来い」やら「冬よ来るな」やらと叫んでいた。

そこまではよかった。全然まったく持って問題はなかったんだ。

事件は放課後に起こった。

「それじゃ、HRを終わります」

担任がそう言うと、クラスの奴らははしゃぎだした。

今日はほとんどの部活が休みで、いつもの倍以上の人数が教室に残っていた。直人はまた夏服談論を始め、俺はそれが終わるまで、少し離れた席で本を読んでいた。

そして、あいつが来たんだ。

ガラッ！

息切れをしている少女が、教室のドアを開けて教室中を見渡していた。もちろん、クラス全員の視線が、そいつに集まった。

白ワンピースの制服は、ここらでは1校しか着ていない。

結構有名な、女学院の制服。

短い茶髪に、大き目の瞳。見覚えのあるその姿に、直人が呆然と呟いた。

「菖蒲………?」

直人の声を聞いた菖蒲は、ホツとしたように俺の後ろにいる直人に駆け寄った。

「よ、よかった、まだ………帰ってなかった」

安心したように笑っている菖蒲を見て、もちろん周りの男子は黙っていない。

「何だよ直人！誰だよ、この可愛い子！」

1人の男子がそういう始めると、もちろん周りの男子たちも便乗し始める。

「メチャクチャ可愛いじゃん！名前は？」

「君、直人のなんなの？フリーなら俺にしなない？」

「合コンしようよ！」

「マジでタイプだって！」

口々に男子にそう言い募られた菖蒲は、今きつと、困ったような表情で直人を見ているんだろう。それを考えると、本より興味はそちらに引かれた。

そして、次の一言が全ての原因だった。

「何しに来たんだよ」

冷たい一言だった。

「…………え？」

怯えたような菖蒲の声を聞いてから、男子たちもハツとしたよう

に口々にまた言い出した。

「何だよ、直人！そんな言い方ないだろ！」

「そつだよ！せつかく来てくれてんのに」

「何言つてんだよ、らしくないぞ？」

直人はそれに対しては何も言わなかった。俺は何やら様子のおかしい直人が気になって振り向き、怯えた表情の菖蒲を見た。

久しぶりに、間近で見た気がした。

「何でここに来たんだって、聞いてんだよ」

その声を聞いた菖蒲は、酷く怯えた表情をした後、確かにこちらを見た。俺を見て、助けを求めめるかのように泣いた菖蒲を見て、次の瞬間には大きな音を聞いた。

ガシャンッ！！！！

驚いて音のするほうに目を向けると、右手で窓を割った直人がいた。怒りのせいなのか肩が震えていて、微かに俯いているせいで表情が見えない。だが、一瞬だけ見えた。

苦しそうに、歯を食いしばっていた表情を。

「……なんで来たんだよ」

右手を下ろした直人は、菖蒲を凝視した。それはもう、かなり怒

っている目で。

「お前、女子高だもんな。たまには男子を見たいとか思って来たとか？」

嘲笑うかのような笑みを浮かべる直人を見て、俺はため息をついた。本を机の上に置き、直人の周りにいた男子に少し下がるよう指示を出す。

男子も、遠巻きに見ていた女子たちも、何が起こるのかとハラハラしているのが目に見える。

「やめとけて、蓮」

そう呟かれた俺は、ニヘラツと不敵に笑って見せた。そしてその男子の頭を小突いた。

「平気だよ。俺は、な」

その言葉に眉を顰めた周りの男子は、俺が直人を見た瞬間に遠くへと移動した。多分、直人を見る俺の目がかなりやばかったんだろう。

「そん、なんじゃ……」

震える声が、あのをときを思い起こさせる。

あの時も震えてたよな、お前。

「大方、男子というよりは、蓮を見に来たんだろうけどよ」

嫌味たっぷりの口調に、菖蒲はつい、と云うような感じで言葉を荒げた。

「何なのよ、さつきから！蓮は今関係な　！」

ガンツ！

直人が近くの机を思い切り蹴り、菖蒲の肩がビクツと震えた。そして、直人は怒りが頂点に達したようだった。

「じゃあ、何でさつきから蓮ばかり見てんだよ?! いい加減にしろよ! そんなんだからいつまで経っても忘れら　」

それ以上は言わせなかった。

俺はギリギリのところまで止めようと考えていたのだが、それよりちょっと早く手が出ていた。

妙に乾いた音が、教室中に響き渡り、同時に倒れるような音も聞こえた。

直人は自分が蹴った机に体を乗せると、驚いたように俺を睨み、掴みかかってきた。

「何すんだよっ!」

鬼のような形相の直人を見て、俺はどこまでも低く、冷たい声で言った。

「触んなや」

直人の手を振り払うと、直人は「なっ?!」と声を上げ、固まった。

「自分、俺の前の言葉忘れたん?」

怒りは、どうやら俺にもあつたらしい。フツフツと煮えたぎっている怒りを静めるように、俺は努めて低い声で言った。

「本気なんやったら、傷つけるようなこと言うんやないで、ドアホ」

その声でようやく我に戻ったのか、直人はその場に立ち尽くした。それを見てから、菖蒲に視線を移す。

「菖蒲」

俺の声に菖蒲は、ビクツ!と肩を震わせた。そして、ゆっくりと俺を見て怯えるように眉を垂らした。

「……大丈夫か?」

極めて優しい声でそう尋ねると、菖蒲はコクコクと震えながら頷いていた。

そんな彼女を見て、ついつい手が伸びた。

頭をクシャクシャで撫でると、菖蒲はゆっくりと緊張を解いた。

「すまん。こいつにはよおっく言って聞かせるさかい、今日は帰

り？」

「でも」

不安げにチラッと直人を見た菖蒲は、訴えるように俺を見た。だが俺は、頑として首を縦には振らなかった。

「今自分が何言っても逆効果や。分かっとるやろ？
それに、こいつがこない怒るんもしゃーないで？　悪いんは、俺らなんや」

菖蒲は目を大きく見開くと、乾きかけていた涙をまた流した。その姿を見て、あの日を思い出す。

俺は震える手をギュッと握り締めると、笑って見せた。精一杯、平気を装って。

「……今日は帰り。どうしてもちゅーんやったら、送ってくさかい」

するとゆっくりと首を振り、「大丈夫」と震える声で言った。そんな菖蒲を見て、俺は苦笑した。

「そないな顔するなや。
それから、こいつから謝るまでは、絶対に自分からメールしたらあかんで？電話もや。ええな？」

もう1度笑ってやると、ようやくホッとしたのか、菖蒲は「うん」と頷いた。そして、切なげに小さく笑った。

「ごめんね、約束……破っちゃって」

「ええで、別に。お前が、そもそもゴッツまっすいプロテイン、飲むだけなんやから」

……………。

「ええっ?!」

素っ頓狂な叫び声をあげた菖蒲を見て、俺はメツチャ笑った。

「約束やる?俺はあないゆうたんになあ…………約束破らなかつたら、飲む必要ないって」

「待つてよ!これもカウントされるの?!」

「結果的に俺と会ったやろ?せやから、カウントや」

「そんなの聞いてない!卑怯だよ!」

「聞いてなくても約束や。」

明日、直人と一緒にプロテイン持って家に行ったるさかい、楽しみに待つとれな?」

「嫌だ!絶対に嫌!」

「約束やもん、しゃーないわ」

シレッと返すと、菖蒲は「うげえ」と気持ち悪そうな顔をした。そんな顔を見て、俺は思わず噴出していた。

「そないアホ面しとつたら、男が逃げるで？」

「そ、そんなことないもん！」

「あるある」

「ないっ！」

必死になっている菖蒲に、「はいはい」と片手をヒラヒラと振ると、やつぱり前と同じように、「ふが　っ！」と妙な怒り方をする。それを見て、俺は菖蒲の目を自分の手で覆い隠した。

これ以上はもう、そばにいてはいけない。

「もう、大丈夫やんな？」

菖蒲は動きを止めると、しばらくしてから小さく頷いた。震えが止まった手を、また微かに震わせながら。

「せやったら、もう帰り。俺はこれから、馬鹿を治したらなあかさかい」

「……分かった」

ようやくいつも通りに戻った菖蒲は、駆け足で教室を出て行った。それを最後まで見送った後、俺は盛大なため息をついた。そして、振り返ることなく言った。

「あんまあいつ、泣かせるなや？」

あのときの涙と、今の涙と。どちらも辛かったけど、今の涙のほうが切なかった。

あの涙を止められたとしても、拭ってやる手を、俺はもう捨てたから。

「……せやないと、俺が搔っ攫うで？」

振り返って直人を睨むと、あいつはこれ以上ないくらい目を大きく見開き、衝撃を受けていた。

それで十分だった。

「さて。保健室行くぞ、直人。早く怪我の治療しないと、化膿するだろうしな」

そう言って教室を出た俺を、しばらくしてから直人が追ってきた。

妙に気まずそうに、目を逸らしながら。

救急箱を元の位置に戻した俺は、息を思い切り吸い込んで肺が空になるまで吐いた。

「帰るか」

時計を見ると、もう5時を過ぎていた。

「今日は早帰れる思ってたんだけどなあ……」

「それでもいつもよりは格段に早いだろ」

「せやな」

階段を登って教室のドアを開けると、意外なことにクラスのやつらがまだ残っていた。

「「……………」」

驚いた表情の俺たちを見て、クラスのやつらはハッと息を呑んでいた。緊張しているような感じだ。

「何してんだよ？みんなして」

そう言いながら、中に入って直人の鞆を持つと、みんなが何故かホツとしたように、肩の力を抜いていた。

「直人、かえ　　る前に職員室だ」

「は？」

声を出した直人に窓を指差すと、物凄いゲツソリした表情を返された。

「また俺まで叱られるのかよ。勘弁しろっての」

「堪忍してゝな、おかん！」

「誰がおかんやねん、アホ。お前のおかんになんてなりとーないわ、馬鹿」

そう言っつて頭をバコツと叩くと、「いっつて！」と声を上げて俺を睨む。そして同時に教室の空気が引き締まった。

妙にみんな気構えしているようだ。

「ハア。ほんま、お前とおると、退屈せんわ。色んな意味で」

屈託なく笑った俺を見て、直人は複雑そうに口を尖らせていた。それがまた面白くて、俺は大爆笑しながら職員室に向った。

4、手紙

あの事件の翌日。

俺たちは予告どおり、プロテイン 前に、直人が俺との勝負に負けて飲んで、ヤッバイ不評だったやつ を持って、菖蒲の家に行った。

もちろん、菖蒲は物凄い顔をして飲んでいた。

そして何故か、俺も飲んだ。つーか飲まされた。

菖蒲曰く、“今私に会いに来たことになるよね？”らしく、無理矢理飲まされた。

もう2度とあのプロテインは飲まない。絶対につー！

そんなことを考えながら登校し、またあの香りに気づく。

「……このところ、多いな」

そう思いつつ、何気にこの香りがすることが嬉しい俺は、今日も妙に高いテンションで学校へと向った。

「つーわけで」

「おっ」

「付き合うことになりました」

ニヤニヤとどこまでも嬉しそうな直人を見て、俺はため息をついた。

あの事件から1ヶ月ほど経った、文化祭の準備期間中の今、俺たちはクラスの出し物である喫茶店の準備をしていた。

「直人と菖蒲に先越されるんは、なんや悔しいなあ」

「だったら誰か好きな奴作れよ」

そう言いながら少し切なげな直人を見て、何となく感じた。

「お前、本当に付き合っではないだろ？お試し期間中、か？」

動きを止めた直人は、俺を見た。それはそれは、とてもとても恨みがましい目で。

……直人がこの目をするってことは、凶星ってことか。

「……お前さ」

「ん？」

「何で普段は鈍いくせに、こーゆーときはっかり鋭いんだよ？」

知るか。

そんなこんなで始まった、学園祭だ。

学園祭に菖蒲が来るのかと思ったのだが、今はとても揺れてしまっているらしい。だから俺を見て心が折れてしまわないよう、自分から行かないと直人に言っていたらしい。

学園祭が終わったら、夕方デートがあるのだと、直人は朝から上機嫌だ。

感じていた。少しずつ、少しずつ、菖蒲の心が直人に傾いているのを。

分かってた。少しずつ、少しずつ、互いの想いが薄くなっていること。

思っていた。いつもいつも、毎日毎時間、同じことを、繰り返して自分に言い聞かせるように。

いい傾向なのだ。菖蒲が俺を忘れて、直人を好きになって、付き合うことが。それが何よりもいいことだと。だから、だからこんな感情を持つてはいけない。

「直人？」

立ち入り禁止の階段に座っていた直人は、携帯画面を見て優しげに笑っていた。小さく開かれた口を隠すように、右手で口元を覆っている。

その表情がどこまでも嬉しそうだったからなのか、俺は踵を返して元来た道を歩く。そして、またあの香りがした。

「?」

振り返っても、そこには誰もいない。

「……………」

行くあてがなくなった俺は、何となくというノリでその香りを追った。そして着いた先は

「図書室？」

眩いことから、ハツとなって周りを見る。文化祭でここらは使われないが、何となく気になった。

甘い香りはする。けれど、その香りの正体が未だに分からない。

「……………」

好奇心。

どうしてこの香りに興味が引かれるのかは分からなかった。

でも、何かに指し示されたかのように、俺は図書室に入って一冊の本を手にとった。

「sentimento? 何だ、これ」

白い表紙のこの本は普通の文庫本ほどの大きさで、真ん中に黒字でそう書かれていた。パラパラと捲ると、あるページで何かが落ちてきた。

「ん?」

拾い上げてみると、それは紙だった。2つ折りにされたその紙には、“誰か読んで下さい”と書かれている。俺は挟まれていたページを見て、眉を顰めた。

『inconsolato (悲しみのページ)』

そう、ページ数の横に書かれていた。そしてそのページに書かれていた文は、酷く悲しかった。

『伝えたいと思う。けれど、伝えられない。伝えられなかった。伝えてはいけなかった。伝えることは出来ない。』

分かりたいと思う。けれど、理解できない。理解できなかった。理解してはいけなかった。理解してはいけない。

触れたいと思う。けれど、やっぱりそれだって。

悲しみとは、切なさとは、何だろう。

それを感じて、人間は成長すると言う人がいる。けれど自分は思
うんだ。

そんな思いをしなければ成長しないのならば、大人になれないと
いうのならば。

子供のままで、いいよと

それじゃいけないのだということくらい、分かってる。頭では、
ちゃんと理解できてる。でも、心だけは、簡単に動かない。動けな
い。

分かってるよ。分かってるんだよ。でも、それでも と、その
思いが消えない』

俺は試しに次のページを捲ってみた。また文が書かれているが、
次のページには堂々と doic ezze (喜びのページ)と書かれ
ていた。

「……………」

わざわざ悲しみのページに手紙を挟めたのは、この手紙が悲しい内容だからなのだろうか？それとも、偶然？

俺は手紙を開き、目を見開いた。

紙から、微かに漂った香り。それは、俺がずっと気になっていた香りだった。

「この手紙を、書いた人が…………？」

誰なのか。この香りは何なのか。どうしてこんなにも気になるのか。

俺はドキドキと高鳴っている心臓を抑えながら、ゆっくりと綺麗に整っている字を目で追った。

『名前は明かせません。』

でも、名前がないと不便かもしれないので、neveと呼んで下さい。neveとは、イタリア語で雪を意味する言葉です。

私がこの手紙を書いた理由は、どうしても、誰かに知ってもらいたいことがあったからです。

私の周りの人たちは優しすぎるから、どうしても伝えられないから。

だからできれば、誰でもいいから知ってもらいたいと思ったからです。

もしこの手紙を読んで、私と文通をしてくださるのなら、この本のどこかのページに返事を書いてはさんでください。文化祭2日目の夕方に取りに來ます。

neve』

その字を見て、内容を読んで、何故だか無性に悲しくなった。

優しすぎたら、話せない内容。でも、誰かに話したいという思いがある。そしてできれば、知っていて欲しい。気にして欲しい。でも、誰かに心配をかけるのは嫌だ。

そんな思いが、伝わってきたような気がした。

そしてそんな思いを、俺も知っている。

「……………」

俺は手紙をポケットに入れると、本を元の位置に戻した。

伝えられない思いがある。伝えてはいけないのだと言って、自分を自制した。

分かり合いたい思いがある。分かり合ってはいけない関係だと、

自分を自制した。

触れたいと思う人がいる。触れてしまったら戻れないからと、自分を自制した。

子供のままでいい。周りに“ままごと”だと言われたっていい。俺たちが本気なら、それでいいんだ。子供のままなら、どんなワガママでも多少は通るんだ。

でももう、餓鬼じゃないから。無知じゃないから。大人に近づいているから。

進まなければいけないから。

分かるから、分かっているから、だから

辛い

どの言葉も、共感できる。だからこそ、やっぱり辛く苦しい。

できることなら

知りたくなかった

もう日が沈み、文化祭も終わりに近づいていた。明日はもっと盛大に盛り上がるだろう。

キャンプファイアーやらフォークダンスやらがあって、終わる時間もかなり遅くなるからだ。

直人はもういない。

俺は一人で、沈んでいく太陽を見ていた。ガランとした教室には俺以外誰もいなくて、それが逆に心地よかった。

「……………」

俺は手紙を開き、文を見る。綺麗に整っている字は読みやすい大きさで、その人の性格を物語っていた。

誰なんだろう？この香りは、一体何なんだろう？

「neve、か」

ポケットに手紙をしまった俺は、ゆっくりと窓の外へと目を向けた。見えるのは、山に沈んでいく夕焼けだけ。

「……菖蒲」

ポツリと、無意識のうちに呟いた言葉。

呼びたかった。

あのときに、この名を呼んで。呼び止めて、抱きしめて、キスを
して。

でもそれは、許されないことだと分かっていた。だから、気持ち
を殺して彼女と離れた。

それがどんなに辛いことであっても、俺たちは、そうする
ことしかできなかつたから。

そうしなければいけないと、分かっていたから。

分かって、いたんだ。ちゃんと。

「……っ」

視界がぼやけた。頬を、何やら生温いものが滑り落ちる。俺はそ
れを拭うことをせず、夕焼けに見入っていた。

分かっているけど、それに抗おうとする気持ちがある。自分じゃ、
自分だけじゃ、抑えられない思いがある。

溢れる思いは、易々と止められるものではない。

それを知ったのは、つい最近だ。

……忘れるんだ。俺にできるのは、それだけだ。菖蒲への思いを殺して、直人の背中を押す。俺がしてやれることは、それだけだ。

カタツ。

小さな物音だった。でも、誰もいない教室にその音は響く。俺はゆっくりと振り返り、そのまま固まった。

流れるかのような綺麗な茶色の髪。右耳についているピアスは、長さが不揃いの鎖が3本ついている。目はどちらかと言うと細めで、まつげが長い。そんな目から、流れ出ているものを見た。

俺はしばらくその顔を見た後、小さく笑った。

このとき、自然と笑みが浮かんでいた。

作った笑みじゃない。無理した笑みじゃない。ただ何となく、自然と、口元が緩んでいたんだ。

でも、俺が笑った後に先ほどよりも多くの涙を流した彼女を見て、俺はギョツとした。

「え、あ、ちょ……」

アタフタと慌てている俺を見て、彼女も慌てて首を振った。形の整った唇からは、しかし何の言葉も零れ落ちない。

俺はガシガシと頭をかくと、やがてふうとため息をついてから苦

笑した。

「じゅめん」

すると彼女は、さっきよりもっともっとたくさん首を振った。このままでは首が痛くなってしまうだろうかと、そう思ってしまったほど。

「……じゅめ、ね」

小さな声だった。震えている声が、あの子の言葉を思い出させて

酷く、切なかった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6801x/>

君からのメッセージ

2011年10月20日02時06分発行